第九講　『正徹物語』（歌論書）

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

家隆は、四十以後、はじめて作者の[a]名を得たり。それより前もいかほどか歌を詠みしかども、名誉せらるることは、四十以後なりしなり。頓阿は、六十以後、この道に名を得たるなり。かやうに、昔の先達も、初心から名誉はなかりしなり。稽古、数寄、劫（こふ）積りて、名望ありけるなり。

今の時分の人、いまだ、歌ならば一、二百首詠みて、やがて定家、家隆の歌を似せむと思ひ侍ること、[b]をかしきことなり。定家も「行かずして長途にいたることなし」と書きたり。[A]坂東、鎮西のかたへは、日を経てこそいたるべきに、ただ思ひ立ち一足にいたらむとするがごとしと云々。

ただ、数寄の心深くして、昼夜の修行おこたらず、まづなびなびと口がろに詠みつけなば、自然と求めざるに興ある所へ行き着くべきなり。

ただし、後京極摂政殿は、三十七にて薨（こう）じ給ひしが、生得の上手にておはしまして、殊勝のものどもあそばしき。[B]もし

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

八十、九十の老年までおはしましましたらば、いかになほ重宝どもあそばされむずらむと申し侍りし。C宮内卿は、二十よりうちになくなりしかば、いつのほどに稽古も修行もあるべきぞなれども、名誉ありしは生得の上手にてあるゆゑなり。生得の堪能にいたりては、初発心（しょほっしん）の時、便成正覚（べんじゃうしゃうがく）なれば、修行を待つところにあらず。しからざらむ輩は、ただ不断の修行をはげまして年月を送るは、つひに自得発明（ほつみやう）の期あるべきなり。ただ、数寄に越えたる重宝も肝要もなきなり。上代にも、数寄の人びとは、古今の大事をも許し、勅撰にも入れられ侍り。まことの数寄だにあらば、などか発明の期なからむ。

（『正徹物語』）

注

なびなびと…のびのびと。

初発心の時、便成正覚…悟りを求めようと初めて思ったときに、すでに仏としての悟りが完成していること。『華厳経』による。

発明…真理を悟ること。

古今の大事…『古今和歌集』をめぐる歌道の秘事。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選べ。

ａ　名

１　雅号　　２　声望　　３　面識　　４　秀でた技能　　５　名簿に載ること

ｂ　をかしき

１　すばらしい　　２　おくゆかしい　　３　興味深い　　４　適切である　　５　滑稽である

問二　二重傍線部「詠みつけなば」の文法的説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　四段活用動詞「詠みつけぬ」未然形＋接続助詞「ば」
２　下二段活用動詞「詠みつく」未然形＋打消の助動詞「ず」未然形＋係助詞「は」の濁音形
３　下二段活用動詞「詠みつく」連用形＋完了の助動詞「ぬ」未然形＋接続助詞「ば」
４　下二段活用動詞「詠みつく」連用形＋推定の助動詞「なり」連体形＋接続助詞「ば」
５　下二段活用動詞「詠みつく」連体形＋断定の助動詞「なり」連体形＋係助詞「は」の濁音形

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部Ａ「坂東、鎮西のかたへは、日を経てこそいたるべきに、ただ思ひ立ち一足にいたらむとする」の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　京都から関東や九州へは道が遠く、出発する前に何日もかけて準備をしなければならないのに、行こうと思ったその場でただちに出発すること。
2　京都から関東や九州へは道が遠く、何日もかけてようやく行き着くことができるのに、行こうと思ったらすぐに一気に行けると思うこと。
3　京都から関東や九州へは道が険しくて不安であるので、よい日を選んで出発しなければならないのに、行こうと思ってすぐに出発すること。
4　関東から九州へは道がはるかであり、よい日を選びながら何日かごとに進むのがよいのに、気分が乗った日にどんどん先に行こうと思うこと。
5　関東から九州へは道がいく通りもあり、途中途中で道を選びながら進むことができるのに、最初にひと通りしか考えないで出発すること。

問四　傍線部Ｂ「もし八十、九十の老年までおはしましたらば、いかになほ重宝どもあそばされむずらむ」の解釈として適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　もし高齢の人がいらっしゃったならば、立派な歌をさらにたくさん詠んで差し上げていたことでしょう
2　もし高齢の人がいらっしゃって助言してくださるならば、どれほど優れた歌詠みにおなりになることでしょう
3　もし高齢まで生きていらっしゃれば、どれほど周囲から頼りにされることになるでしょう
4　もし高齢まで生きていらっしゃったならば、秀でた歌をさらにどれほどたくさんお詠みになっていたことでしょう
5　もし高齢まで生きていらっしゃっても、どうしていつまでも財宝を使って遊んでいることができるでしょう

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部Ｃ「宮内卿は、二十よりうちになくなりしかば、いつのほどに稽古も修行もあるべきぞなれども、名誉ありしは生得の上手にてあるゆゑなり」の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　宮内卿は、二十歳にならずに亡くなってしまった。修練を十分に積む年月が短い生涯のうちにあったとも思えないが、天賦の才能によって優れた歌を詠んだ。

2　宮内卿は、二十歳にならずに亡くなってしまった。修練を積むには年月がなかったはずであるが、人一倍修練に励んで優れた歌を遺したというのも、天賦の才能である。

3　宮内卿は、二十歳にならずに亡くなってしまった。修練をどのように積んだかは分からないが、天賦の才能だけでは得られない、優れたものが、宮内卿の歌にはある。

4　宮内卿は、二十歳前に亡くなっていたら、修練の成果を書き留めることもできなかったであろう。しかし、二十歳を過ぎて才能が開花し、優れた歌を遺すことができた。

5　宮内卿は、二十歳前に亡くなっていたら、修練を十分に積む年月はなかったであろう。しかし、幸い長寿でいることができたので、優れた歌を後世に遺すことができた。

問六　本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

1　家隆は、四十歳までは歌を詠んでいなかった。

2　昔の人は、初心者と名手とを区別するようなことをしなかった。

3　当代の人は、百首、二百首を詠んだくらいで定家や家隆のまねをしようとする。

4　筆者は、定家の説を使って自分の論を展開している。

5　優れた歌は、素材として自然の風景や事物を選ぶのが当然であった。

6　名歌を鑑賞することは、修行を必要とせず、誰にでもできることである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問七　優れた歌を詠むためには普通の人はどうすればよいと、筆者は言っているか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

※補足

★八代集＝平安前期〜鎌倉初期にかけての左記の八つの勅撰和歌集

（平安時代）

古今和歌集　撰者…紀貫之、紀友則（とものり）、凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）、壬生忠岑（みぶのただみね）

後撰和歌集　撰者…「梨壺の五人」（清原元輔ら）

拾遺和歌集

後拾遺和歌集

金葉和歌集　撰者…源俊頼

詞花和歌集

千載和歌集　撰者…藤原俊成（＝定家の父）

（鎌倉時代）

新古今和歌集　撰者…藤原定家　勅命…後鳥羽院

後撰　拾遺　後拾遺　金葉詞花　千載（＝「せんざい」ですが…。）

〈覚え方〉古今と新古今に挟まれて、間は「**五千**円、**拾**った**後**にまた**拾**い、**金曜しかぜんざい**食べない」

★六歌仙＝平安初期の歌の名人六人

大伴黒主（おおとものくろぬし）、小野小町、文屋康秀（ふんやのやすひで）、在原業平（ありわらのなりひら）、僧正遍昭（そうじょうへんじょう）、喜撰（きせん）法師

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第九講　『正徹物語』（歌論書）

① 飛鳥井雅経（まさつね）は『新古今和歌集』の撰者の一人である。雅経以外の撰者を次の（a）の中から一人選べ。また、撰集の命を下した人物を次の（b）の中から一人選べ。

（a）
ア　源実朝　　イ　和泉式部　　ウ　藤原公任　　エ　藤原定家　　オ　西行

（b）
ア　醍醐天皇　　イ　白河上皇　　ウ　鳥羽天皇　　エ　後白河上皇　　オ　後鳥羽上皇

② 藤原俊成が撰者として編纂した勅撰和歌集を、次の中から一つ選べ。

ア　古今和歌集　　イ　拾遺和歌集　　ウ　金葉和歌集　　エ　詞花和歌集　　オ　千載和歌集

③ 在原業平とほぼ同時期に活躍した歌人名として、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　藤原定家　　ロ　清少納言　　ハ　山上憶良　　ニ　源実朝　　ホ　小野小町

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講

〔解答〕

問一　a　2　b　5　**問二**　3　**問三**　2　**問四**　4　**問五**　1　**問六**　3・4

問七　風流心を深くして、常に修練を怠らずに年月を過ごせばよい。（二十八文字）

〔現代語訳〕

家隆は、四十歳を過ぎて、初めて歌人としての声望を得た。その歳になるまでにも多くの歌を詠んだけれども、評判になったのは、四十歳を過ぎてからであった。頓阿は、六十歳を過ぎて、この歌道で声望を得た。このように、昔の（歌道の）先輩たちも、（歌を）学び始めた時から評判になったわけではない。稽古も、風流心も、長い年月修練を積んで（初めて）、声望が得られるのである。

（しかし）当代の人は、今なお、歌なら百、二百首詠んだくらいで、すぐに定家、家隆の歌を真似ようと思っておりますのは、滑稽なことである。定家も「行きもしないで遠方に至ることはない」と書いている。（遠い）関東、九州の方へは、何日もかけてようやく行き着くことができるのに、思い立ったらすぐに一気に行けるように思うようなものだなどと（書いている）。ひたすら、風流心を深めて、毎日の修行を怠らず、まずはのびのびと滑らかに詠みつけていたならば、自然と意図せず面白い境地に行き着くであろう。

ただし、後京極摂政殿は、三十七歳でお亡くなりになったが、生まれつきの名人でいらっしゃって、優れた歌々をお詠みになった。もし八十歳、九十歳の高齢まで生きていらっしゃったならば、さらにどれほど多くの秀でた歌々をお詠みになったであろうかと（私は）申し上げました。宮内卿（＝後鳥羽院女房宮内卿）は、二十歳にならずに亡くなったので、どれほどの間も稽古や修行を積むことはできなかったであろうが、（歌人として）評判になったのは生まれつきの名人であったからである。生まれつき優れている場合には、悟りを求めようと初めて思ったときに、すでに仏としての悟りが完成している（というのと同じことな）ので、修行を必要としないのである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（しかし）そうでない（＝生まれつきの名人でない）者は、ひたすら修行を怠らずに励んで年月を送れば、ついには自ら会得し真理を悟るときが来るに違いない。まったく、風流心以上に大切な宝も肝心なこともないのである。上代でも、風流な人々は、『古今和歌集』をめぐる歌道の秘事（の習得）も許され、勅撰和歌集にも収められました。真の風流心さえあれば、どうして真理を悟る時がないことがあろうか。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第九講　『正徹物語』（歌論書）

〔解説〕

①　『新古今和歌集』は後鳥羽院の勅命により、藤原定家などが撰進。院＝上皇。

②　藤原俊成が編纂したのは『千載和歌集』。よって、正解はオ。

③　在原業平は六歌仙の一人。よって、同じ六歌仙の小野小町が正解。

〔解答〕

①　a　エ　　b　オ　　②　オ　　③　ホ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。